

不登校経験のある高校生のレジリエンスに対する パフォーマンス活動の効果と学校適応への影響

—K 高校パフォーマンスコースの実践から—

大橋 節子

要旨：不登校児童生徒数（以下「不登校」という）の増加が、我が国において深刻な教育課題となつて久しい。しかし、不登校は未だ減少をみるに至ってはいない。不登校の原因を「学校・家庭・本人」と長年にわたって追及してきたが、近年ますます原因の「多様化」「複合化」が進み、不登校の現状はこの先も不透明であるといえる。さらに、高等学校（以下「高校」という）進学後の不登校や中退などが、ニート等社会的自立に困難を抱える青少年問題の背景にもあるとした（内閣府，2008）。そのため、義務教育以降の不登校、中退問題について、原因究明の議論を重ねるだけでなく、不登校回復への実践的アプローチについて検討すべきだと考えられる。

本研究では、K 高校のパフォーマンスコースで実践されている、身体活動を中心にした「パフォーマンス活動」に焦点をあてた。このコースでのパフォーマンス活動が、不登校回復のためのレジリエンス育成に寄与し、学校適応に影響するのか検討することを本研究の目的とした。

キーワード：パフォーマンス活動、レジリエンス、不登校回復、学校適応

第1章 不登校回復に至らない現状と課題

1.1 減少しない不登校児童生徒数、調査と実態

稲村（1994）は、学校に行かない、行けない子ども達の状態をめぐる研究は、1930年代からアメリカで始まったとしている。1940年代から「学校恐怖症」や「学校ぎらい」そして、1970代後半には「登校拒否」と呼ばれ、子ども達の状態により、使用される用語が分類されたとし、近年では、広くその状態をとら

えた「不登校」という用語が用いられ、学校に行かない、行けない状態を表す用語も様々に変遷してきたと述べた（稲村，1994）。1990年以降、我が国でも研究がさかんに行われるなか、不登校の数は増加し、2001年には13万人を数えた。その後、文部科学省（以下、「文科省」という）の学校基本調査（以下、「調査」という）上、不登校の数は減少したとされている。しかし、数は依然高止まりで、調査上の数の減少を「不登校対策が功を奏している」と考えることは尚早であり、今後の推移を見ていくことが必要である。文科省

Table 1 長期欠席生徒数と不登校者数における推移（国・公・私立含む）¹⁾

	小学校			中学校			高等学校		
	長期欠席 (病気・経済的 理由・その他)	不登校	合計	長期欠席 (病気・経済的 理由・その他)	不登校	合計	長期欠席 (病気・経済的 理由・その他)	不登校	合計
2009年	30,110(57.4%)	22,327(42.6%)	52,437	28,287(22.1%)	99,923(77.9%)	128,210	32,610(38.7%)	51,728(61.3%)	84,338
2010年	30,131(57.3%)	22,463(42.7%)	52,594	27,289(21.9%)	97,255(78.1%)	124,544	32,012(36.5%)	55,776(63.5%)	87,788
2011年	31,718(58.4%)	22,622(41.6%)	54,340	27,416(22.5%)	94,637(77.5%)	122,053	30,165(34.9%)	56,361(65.1%)	86,526
2012年	32,709(60.6%)	21,243(39.4%)	53,952	30,260(24.9%)	91,249(75.1%)	121,509	28,219(32.9%)	57,664(67.1%)	85,883

(注)「長期欠席生徒」とは、通算30日以上欠席した生徒

(2013)の調査による推移を見ると、Table 1では、2009～2012年度までの小・中学校における不登校合計数の減少が示されているが、長期欠席(病気・経済的理由・その他)を含めると、2012年度の小・中学校の合計は175,461人となり、不登校のピークと言われる2001年度の13万人を超える数字となる。伊藤(2009)は、不登校の調査が、人数の数え方、不登校の定義によっても実態の見え方が異なることを挙げて、「データからの学びや発見は貴重だが、多くのことを教えてくれるのは、実際にかかわりを続けた子どもや保護者である」と述べている。

1.2 不登校原因の「多様化」「複合化」について

これまでに議論され研究されてきた不登校の原因は、様々な調査の結果から、①学校原因論、②家庭原因論、③本人原因論の3つに大きく分類されている(伊藤, 2009)。まず、「学校原因」として、友人、教師、先輩、後輩など学校における人との関わりの問題や、学業の不振、進級、進学への不安など学習面における問題があげられる。近年では、学習障害、注意欠陥多動性障害を起因とする障害を持つ子どもが、コミュニケーションの問題や学習のつまづきなどで不登校にいたる場合もあると述べている(文科省, 2003)。次に、「家庭原因」は、親と子の関係だけではなく、離婚での家族の離散や、経済破綻による家庭崩壊など、社会情勢による急激な家庭環境の変化があげられる。そして、原因のなかで最も多いとされるのが「本人原因」によるものであり、病気など、学校に行きたいが行けないという事情を除き、中・高校生に多い無気力や情緒の混乱、遊び、非行などがあげられる。このように、伊藤(2004)は、近年不登校に至る原因は、「多様化」、「複合化(いずれが主であるか決めがたい)」が進み、行きたいけれど行けないという従来の神経症的な不登校以外に、非行、虐待、発達障害の二次的問題として不登校になるなど、原因の裾野は広がっているとした(伊藤, 2004)。

1.3 義務教育以降の不登校や中退問題

思春期における不登校は、不登校状態に加えて身体症状、不安、焦燥感、強迫症状、家庭内暴力、摂食障害、ひきこもりなどの諸現象をともなうものが多く、状態像の把握が複雑だと述べている(内閣府, 2007)。また、伊藤(2012)は、スクールカウンセラーや適応指導教室との連携や協働が重視される小・中学校とは異なり、高校では、支援を受ける機会が格段に減り、

その結果出席日数や欠課時数が規定を超えて、原級留置や退学、転学を余儀なくされるケースも多いとしている(伊藤, 2012)。文科省(2013)の調査で、高校における2012年度の不登校・長期欠席者数は、85,883人で、中退者は、51,780人となっている。近年、ニート、ひきこもり、フリーターなどの増加も深刻な社会的問題であり、それらは高校進学後の不登校、中退問題からも端を発するとされている(内閣府, 2011)。このようなことから、義務教育以降、高校における不登校予防・回復、中退防止など、将来への社会的自立につながる対応策が必要であると考えられる。最近では、不登校の再発や中退への不安を抱えた生徒の受け入れ先として、単位制や通信制の高校が増加しているものの、高校での不登校や中退はまだ減少することがなく、受け入れ高校の増加だけでは決して十分な支援とはいえない。前節のような原因追究だけにとどまらず、不登校への回復や中退防止への過程に注目することが必要であるといえる。そこで、本研究では、在籍生徒の半数に不登校経験があり、不登校回復や学校適応の教育支援をおこなうK高校を対象に調査を行う。とりわけ、K高校のなかでもパフォーマンスコースに焦点をあて、身体活動を中心に据えたパフォーマンス活動が、レジリエンスや学校適応に影響するのかを検討することを目的とする。

第2章 不登校回復と 学校適応への医療領域アプローチ

2.1 不登校問題を「心」と「身体」の両面から診る 医療現場からの提言

前章では、不登校を引き起こす「原因」に関する因果論的な議論を概観してきたが、この章では、「不登校臨床」という医療領域からのアプローチに焦点をあてる。たとえば齊藤(2006)は不登校について、戦後児童青年期精神医学史の主要かつ象徴的な課題で、自閉症と並び特有な位置を占め、さらに不登校論の発現原因をめぐり、「子どもの心性や親の特性」、「学校環境の問題」など対立に至ったとし、社会的に不登校は「心の問題」として取り扱われる傾向にあり、身体的な症状も心理的な面から起きる結果として扱われてきたと述べている(齊藤, 2006)。しかし、不登校を身体的疾患の面から医療的サポートを行う三池ら(2009)は、不登校に起きる身体の問題を、一つの病態としてとらえるべきであると述べ、睡眠を中心とした生活リズムに焦点を当て、正常な睡眠を基本に「眠

育」として身体の正常化に取り組んでいる。また、田中（2009）は、小児心身医学会でも取り上げられている、子ども達の「起立性調節障害」の疾患について、頭痛や吐き気などの子どもの不定愁訴を、不登校由来の怠け症状と判断せず、医師の診察と適切な治療が必要だと述べている（田中，2009）。このように、不登校への身体症状へのアプローチの重要性が、医療領域の分野でも示唆されているといえる。K 高校のパフォーマンスコースにおいて、生徒の身体に働きかける「パフォーマンス活動」が、不登校経験のある生徒の不登校回復過程へのアプローチとなり、学校適応の促進に繋がるのか、本研究では、レジリエンス（精神的回復力）の向上という観点から検討する。

2.2 レジリエンスにある状態と不登校にある生徒の状態の特徴と関連

Rutter（1985）は、ネガティブな人生経験やストレスフルな環境において、適応を保つ者や不適応になる者もいるという、精神疾患の防御機能における個人差を、レジリエンスという概念を用いて初めて説明した（Rutter, 1985）。その後、Grotberg（2003）は、レジリエンスを、「困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態を導く特性」と定義し、この潜在的な回復力は誰もが備えていると述べた。また、石毛ら（2005）は、レジリエンスとは、困難な状況やネガティブな心理状態に陥っても重篤な精神病的な状態にはならない、あるいは回復できるという個人の心理面の弾力性であるとした。レジリエンスにおける定義がなされて以後、小塩ら（2002）は、レジリエンスの状態にある者の心理特性を反映する「精神的回復力尺度」を作成し、探索的因子分析の結果、次の3つの下位因子「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」で構成されることを明らかにした（小塩ら，2002）。小塩（2011）によると「新奇性追求」は、興味・関心の多様性さで、新たな活動を生み出し、深刻な出来事から前へと進みだす一歩につながる。「感情調整」は、内的な感情状態、感情に関する心理的プロセスの開始、維持、制御できる程度を表し、感情が混乱してもうまく感情をコントロールし、混乱を収める回復への一歩を早めるとした。また、「肯定的な未来志向」は、将来の夢や目標をもち、将来の計画を立てることで不安や脅威をもたらす状況でも先を見通し、前向きな展望を持ち続け、精神的な回復をもたらすとした（小塩，2011）。このように、小塩ら（2002）が示した精神的回復力の3つの下位因

子のそれぞれは、不登校の状態にある児童・生徒の特徴と対応していることがわかる。たとえば、不登校状態の子ども達の場合、新しい活動を生み出し、深刻な状態から一歩前に進む「新奇性追求」を行うことが難しい。また、感情が混乱した際、感情をコントロールすることや、混乱を収める回復への一歩を早める「感情の調整」が難しい。さらに、将来の夢や目標がなく、将来の計画を立てられず、不安や脅威で先を見通す「肯定的な未来志向」をもちにくい状態と考えられる。Grotberg（2003）の言葉を用いて言い換えれば、「不登校という困難な出来事が克服できず、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態にないこと」となる。また、精神的回復力尺度と自尊感情には正の有意な相関関係が示されたと述べた（小塩ら，2002）。深谷（2009）は、日本の子どもたちは他の国の子どもたちに比べ、「自分は成績が悪い、性格が悪い、努力しない」と回答するなど自尊感情の低さや、困難を乗り越える力の弱さがあり、健康で積極的な自分のイメージ（自尊感情）を育てることが大切だと述べた（深谷，2009）。次節では K 高校の身体活動を中心に据えたパフォーマンス活動とレジリエンスの関連について検討する。

2.3 研究対象とした K 高校の概要とパフォーマンス活動の概要

2.3.1 K 高校の概要

近年、不登校および中退対策として、出席日数に自由度を持たせた単位制高校やカリキュラムに柔軟性を持たせた通信制高校の特色ある取り組みがみられるようになった。K 高校は 1992 年に創立され、現在指導拠点は、36 都道府県 64 か所にあり、生徒数は、10,625 名（内全日型通学生徒は 8,488 名）である。小・中学校において不登校経験のある生徒が半数程度在籍し、他校と比較してもその割合は著しく多い。また、K 高校における大学進学率は 33.4%（通信制高校 16.3%、全日制・定時制 54.3%）、短期大学、専門学校進学率は 30.8%（通信制高校 20.7%、全日制・定時制 22.9%）である。不登校経験のある生徒の通学には、生徒の状況により通学日の軽減や、学習面でのサポートなど、個々の回復に合わせた集団授業や個別授業がある。また、進路変更によるコース間の移動も、生徒、保護者、教員間の話し合いが行われ希望に応じて認められており、不登校再発や中退の防止に向けた取り組みがなされているといえる。K 高校は通信制高校であるが、「登校すること」を基本にした「全日型

通学方式」に特徴があり、K 高校においては、不登校経験のある生徒へ登校を前提とした不登校回復過程へのアプローチが行われていると考えられる。

2.3.2 K 高校パフォーマンスコースの活動概要

K 高校では、柔軟な通信制高校のカリキュラムの特徴を活かし、パフォーマンスコースの授業を組み立てている。その授業には、劇場を使った本格的な公演を始めとして、地域の行事や施設の訪問等のボランティア活動も組み込まれている。教員は、俳優や舞台演出の経験者や、活動分野別のプロのパフォーマーで、専用スタジオを使い、ダンス・芝居²⁾・インプロ³⁾・歌・ラップ・殺陣⁴⁾の指導をおこなっている。パフォーマンスコースの総授業数は4月から9月の6カ月間(夏合宿を含む)で1044時間となり、総授業数の76.1%にあたる794時間は、身体の活動を中心としたパフォーマンス活動にあてている。また、身体を使ったパフォーマンス活動は、演劇専科の設置されている他の高校の身体を使う活動の3~5倍の時間数である。

2.3.3 K 高校のパフォーマンス活動の調査と本研究の目的について

前節では、K 高校の概要やパフォーマンスコースの活動内容について紹介をしたが、K 高校を対象とした伊藤(2012)の調査において、「望み通りの学校に出会えた」や「学校生活を通して自信がついた」など学校適応に関してパフォーマンスコースに所属していた生徒が最も高い評価を示したことも判明している。このようなことから、K 高校のパフォーマンスコースの活動を調査することによって、本研究の目的である、不登校回復過程のアプローチによるレジリエンスの向上と学校適応の関連について検討できると考えられる。

本研究ではそのために、パフォーマンス活動が、精神的回復力尺度の下位因子である「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」にどのような影響を及ぼすのか、不登校経験ありなし別に算出し検討する。なお、学校適応についての指標は、不登校であった生徒が、学校に登校した出席日数から出席率を算出し、

学校適応の指標にして検証するものとする。そのための方法は、以下の章で述べる。

第3章 方法

3.1 コース別および不登校経験ありなし別によるレジリエンスの検討

本調査では、質問紙調査法を用いて、コース別および不登校経験ありなし別にレジリエンスの程度を検証する。小・中学校時代に、不登校を経験してきた生徒が半数在籍するK 高校(広域通信制高校)の高校1年生から3年生を対象とした。

3.1.1 調査対象

対象人数は、656名(不登校経験あり:357名,不登校経験なし:299名)であった。その内訳は、パフォーマンスコース112名(不登校経験あり:48名,不登校経験なし:64名),総合進学コース157名(不登校経験あり:91名,不登校経験なし:66名),国際コース51名(不登校経験あり:21名,不登校経験なし:30名),ペットコース40名(不登校経験あり:19名,不登校経験なし:21名),福祉心理コース26名(不登校経験あり:17名,不登校経験なし:9名),オンリーワン・フレックス・在宅コース270名(不登校経験あり:161名,不登校経験なし:109名)であった。

3.1.2 調査時期

調査時期は、高校1年生は入学直後、高校2,3年生は進級時直後である2012年5月に行った。

3.1.3 精神的回復力尺度を用いた理由

回避や解決が困難で問題を抱えた状態にあっても、精神的回復力のある者は、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」これらの心理的特性を持っており、不登校状態の生徒の特徴と逆であることが示唆される。不登校の生徒は、新しい活動への取り組みに対する躊躇があり、感情のコントロールが難しく、また、将来の夢や展望が見えないなど困難な問題を抱えた状態にあると考えられる。このことから、本研究

Table 2 広域通信制高校 K 高校アンケート回収者年齢分布

対象生徒数		人数	平均年齢	標準偏差	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳	30歳	32歳
					15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳	30歳	32歳
対象生徒数	5日通学	437	16.27	1.16	115	150	132	36	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0
	フレックス	88	16.77	1.04	10	26	29	20	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	在宅	131	17.95	2.65	7	19	49	29	10	6	1	2	0	3	0	1	1	2	0	1
	合計	656	16.67	1.69	132	195	210	85	13	7	2	2	0	4	0	1	2	2	0	1

Table 3 学年別・コース別・男女別・不登校経験ありなしの人数表

	コース	不登校経験あり		不登校経験なし		合計
		M	F	M	F	
1年	パフォーマンス	11	15	9	21	56
	総合進学	21	15	12	3	51
	国際	5	4	8	4	21
	ペット	2	9	1	4	16
	福祉心理	3	4	2	1	10
	オンリーワン/ フレックス/在宅	24	13	21	15	73
	小計	66	60	53	48	227
2年	パフォーマンス	6	7	8	12	33
	総合進学	12	22	19	5	58
	国際	4	4	8	5	21
	ペット	0	3	3	5	11
	福祉心理	3	3	2	1	9
	オンリーワン/ フレックス/在宅	19	27	18	9	73
	小計	44	66	58	37	205
3年	パフォーマンス	4	5	5	9	23
	総合進学	7	14	17	10	48
	国際	2	2	2	3	9
	ペット	0	5	0	8	13
	福祉心理	2	2	2	1	7
	オンリーワン/ フレックス/在宅	38	40	28	18	124
	小計	53	68	54	49	224
合計	163	194	165	134	656	

では、身体活動を中心に据えたパフォーマンス活動によって、精神的回復力に変化が生じるのか検証することを目的とした。レジリエンスを測定する尺度として、小塩ら（2002）が作成した精神的回復力尺度を用いた。その尺度は、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」や、「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」などの「新奇性追求」（7項目）、「自分の感情をコントロールできるほうだ」や、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」などの「感情調整」（9項目）、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」や、「将来の見通しは明るいと思う」などの「肯定的な未来志向」（5項目）の3つの下位因子の合計21項目からなり、評定者には「はい」（5点）から「いいえ」（1点）までの5件法で評定を求めた（付表1）。

3.1.4 質問紙の倫理的配慮

調査協力先のK高校の先生方には、事前に調査内容を説明し理解を得た。アンケートは、記名式で行ったが、プライバシー保護のため名前とデータが照合できない形で分析処理を行う旨生徒に伝えた。さらに、回答は任意であり、回答の有無やその内容いかんによって、学校生活において不利益をこうむることがない

との説明が先生方からなされた。甲南女子大学大学院の倫理審査を経て、調査の趣旨に同意が得られた者のみに、質問紙を配布し回答を求めて調査を行った。

3.2 コース別および不登校経験ありなし別による学校適応の検討

本研究では、学校適応の判断の指標として、出席簿から出席率を算出した。この指標を使用する理由は、不登校とは学校に登校しない現象であり、まず学校に登校し出席となることが学校適応において欠かせない要件となるためである。それゆえ今回、K高校において、全コースで毎朝のホームルームから授業に出席し、出席簿で確認できた生徒を出席扱いとした。測定期間は、入学式および進級式直後の4月から11月（8月を除く）までとした。

第4章 結果

4.1 調査対象者の回答数及び年齢

対象者671名に対し質問紙を配布し、671名から回答を得た。671名のうち欠損値のある15名（2.24%）を除き、656名を分析対象とした。対象者の平均年齢は、16.7歳（SD=1.69）であった。不登校経験ありなし別の平均年齢は、不登校経験ありが16.7歳（SD=1.68）、不登校経験なしが16.7歳（SD=1.71）であった。

4.2 「精神的回復力尺度」（小塩ら，2002）の因子構造と信頼性の確認

小塩ら（2002）の研究では、「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」の3つの下位因子に分かれることが統計的にも示されており、本研究においても小塩ら（2002）の因子に従って分析をおこなった。「新奇性追求」に該当する各項目の信頼性係数は、 $\alpha = 0.64$ 、「感情調整」に該当する各項目の信頼性係数は、 $\alpha = 0.71$ 、「肯定的な未来志向」に該当する各項目の信頼性係数は、 $\alpha = 0.70$ と各下位因子とも十分な信頼性を有していた。筆者も因子分析を行ったが大差はなく、累積寄与率は41.44%であった。精神的回復力尺度の下位因子ごとの得点の算出の仕方については、小塩ら（2002）の質問紙に従って、下位因子ごとの各項目の評定値を合計し項目数で割って算出し、それを尺度得点とした。また、逆転項目についても小塩ら（2002）の項目に従って変換し、他の項目と同じ数値の方向性で測定できるように処理した（付表1）。

4.3 レジリエンスに対するパフォーマンス活動の影響

本調査では、不登校経験のある生徒のパフォーマンス活動がレジリエンスに対してどのような影響を及ぼすのかを検討するため、コースおよび不登校経験のありなしを被験者間要因とし、精神的回復尺度の下位因子である「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」ごとの得点を目的変数として、2要因の分散分析を行った。

4.3.1 「新奇性追求」の結果

新奇性追求得点については、コースの主効果 ($F(4,625) = 7.71, p < .05$) が認められた。Tukey の HSD 法による多重比較の結果、パフォーマンスコースと他の4つのコース { (総合進学, 福祉心理・ペット・国際, オンリーワン・フレックス123, 在宅) 以下、「4つのコース」という } に有意差が認められた ($p < .05$)。また、他の4つのコース間に有意差は認められなかった。不登校経験ありなしの主効果 ($F(1,625) = 2.34, ns$) および、コースと不登校経験ありなしの交互作用 ($F(4,625) = 1.03, ns$) は有意な効果が認められなかった。つまり、不登校経験のありなしにかかわらず、パフォーマンスコースは他の4つのコースと比較して新奇性追求得点が高いことが示された。

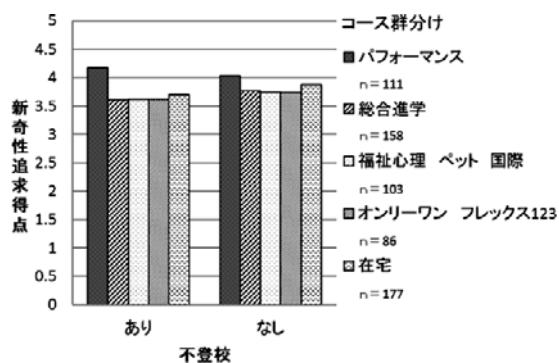


Figure 1 レジリエンス-新奇性追求の推定周辺平均 (全学年)

4.3.2 「感情調整」の結果

感情調整得点については、不登校経験ありなしの主効果 ($F(1,614) = 23.07, p < .05$) が認められ、不登校経験ありの生徒の方が、不登校経験なしの生徒と比較して感情調整得点の低いことが示された。一方、コースの主効果 ($F(4,614) = 1.09, ns$) および、コースと不登校経験ありなしの交互作用 ($F(4,614) = 0.79, ns$) については、有意な効果は認められなかった。つまり、コースにかかわらず、不登校経験ありの生徒は、不登校経験なしの生徒より感情調整得点が高いことが

示された。

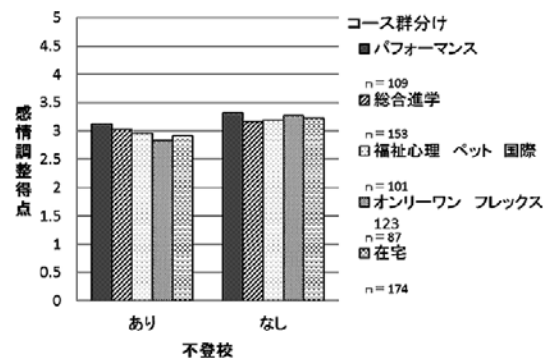


Figure 2 レジリエンス-感情調整の推定周辺平均 (全学年)

4.3.3 「肯定的な未来志向」の結果

肯定的な未来志向得点については、コースの主効果 ($F(4,613) = 6.68, p < .05$) が認められた。Tukey の HSD 法による多重比較の結果、パフォーマンスコースと他の4つのコースに有意差が認められた ($p < .05$)。すなわち、パフォーマンスコースの肯定的な未来志向得点は、他の4つのコースと比較して高いことが示された。また、不登校経験ありなしの主効果 ($F(1,613) = 11.26, p < .05$) が認められ、不登校経験ありの生徒は、不登校経験なしの生徒と比較して有意に肯定的な未来志向得点が低いことが示された。一方、コースと不登校経験ありなしの交互作用 ($F(4,613) = 0.77, ns$) は認められなかった。以上のような結果から、不登校経験のありなしにかかわらず、パフォーマンスコースは他の4つのコースと比較して肯定的な未来志向得点がより高いことが示された。

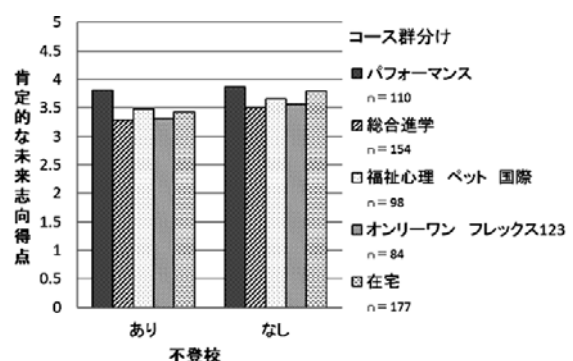


Figure 3 レジリエンス-肯定的な未来志向の推定周辺平均 (全学年)

4.4 K 高校における学校適応の指標とした出席状況の結果

パフォーマンス活動が学校適応に与える影響を検討するため、3.2で述べたように出席率を学校適応の指標として、コース別及び不登校経験ありなし別に比較

Table 4 コース別・不登校経験ありなし別の出席率の平均と分散分析の結果

		パフォーマンス		総合進学		福祉・心理・ペット・国際		不登校有無	コース	交互作用
		N	M (SD)	N	M (SD)	N	M (SD)	F value (df=1,435)	F value (df=2,435)	F value (df=2,435)
出席率	不登校なし	69	0.95 (0.12)	69	0.92 (0.12)	71	0.94 (0.11)	30.27*	6.51*	2.38†
	不登校あり	54	0.92 (0.16)	105	0.81 (0.20)	76	0.83 (0.20)			

* $p < 0.05$ † $p < 0.10$

した。測定期間としては、学校においても生徒が休みがちになる5月の連休明け、および不登校経験ありの生徒にとって不登校に逆戻りしやすいと考えられる、夏季長期休暇を含んだ、4月から11月（8月を除く）までとし、出席率の変化をコースごとに比較した。具体的には、出席率を目的変数とし、コース、不登校経験のありなしを被験者間要因とし、2要因の分散分析をおこなった（Table 4）。結果は、不登校経験ありなしの主効果が認められ、コースにかかわらず不登校経験ありの生徒の方が、不登校経験なしの生徒より出席率が低いことが示された。また、コースの主効果が認められ、多重比較の結果、不登校経験のありなしにかかわらずパフォーマンスコースは他のコース（総合進学、福祉心理・ペット・国際）よりも出席率が高いことが示された。また、コースと不登校経験ありなしの交互作用については、有意傾向が認められた。多重比較の結果、不登校経験ありの生徒ではパフォーマンスコースが他のコース（総合進学、福祉心理・ペット・国際）よりも出席率が高いことが示されたが、不登校経験なしの生徒では、コースごとで出席率に有意差はほぼ見られなかった。また、パフォーマンスコースの中では、不登校経験ありなしによって出席率に有意差は見られなかったが、他のコース（総合進学、福祉心理・ペット・国際）では、不登校経験ありの生徒の方が、不登校経験なしの生徒より出席率が低いことが示された。

次に、月別の平均出席率の状況を、不登校経験ありなし別に分け、コース別の出席率を算出した。なお、不登校経験ありなし別・コース別の月別平均出席率については、統計的処理は行っていない。全学年平均から、不登校経験ありの生徒（Figure 4）の出席率は、月ごとでの差が認められた。しかし、パフォーマンスコースは4月から11月（8月を除く）までの平均出席率を算出すると94.9%と高く、ペットコースと比較すると15.4%高く、国際コースとの比較も7.3%高い。不登校経験なしの生徒（Figure 5）は、5月の連休明け、夏季長期休暇など、休みがちになる時期も押

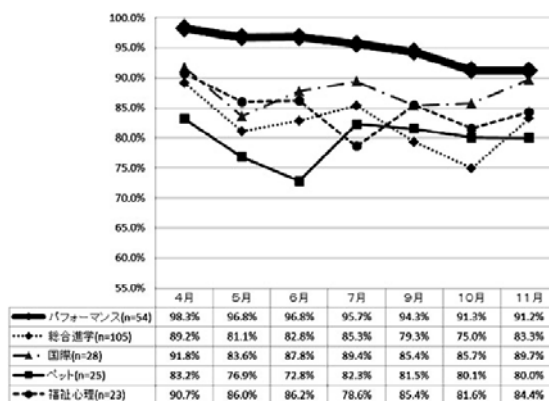


Figure 4 全学年コース別・月別平均出席率（不登校経験あり）

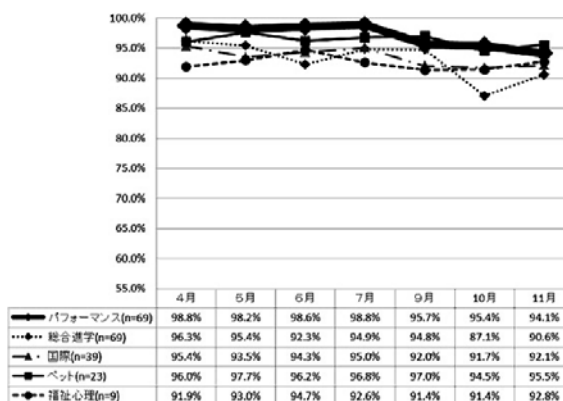


Figure 5 全学年コース別・月別平均出席率（不登校経験なし）

しなべて、平均90%以上で推移しており、10月の総合進学コースの87.1%を除いては、コースによる差異もほとんど認められなかった。パフォーマンスコース以外のコースの月別平均出席率が月ごとに大きく変動していることに比べ、パフォーマンスコースは高い出席率で推移していることが示された。

4.4.1 学年別コース別出席率比較による結果

次に1年生から3年生までの学年別による出席率の状況を、不登校経験ありなし別及びコース別に出席率を示した（Figure 6・Figure 7）。なお、これらについても統計的な処理は行っていない。不登校経験ありの生徒の平均出席率（Figure 6）は、4月から11月までの間でほぼ全てのコースにおいて、グラフが示す通り

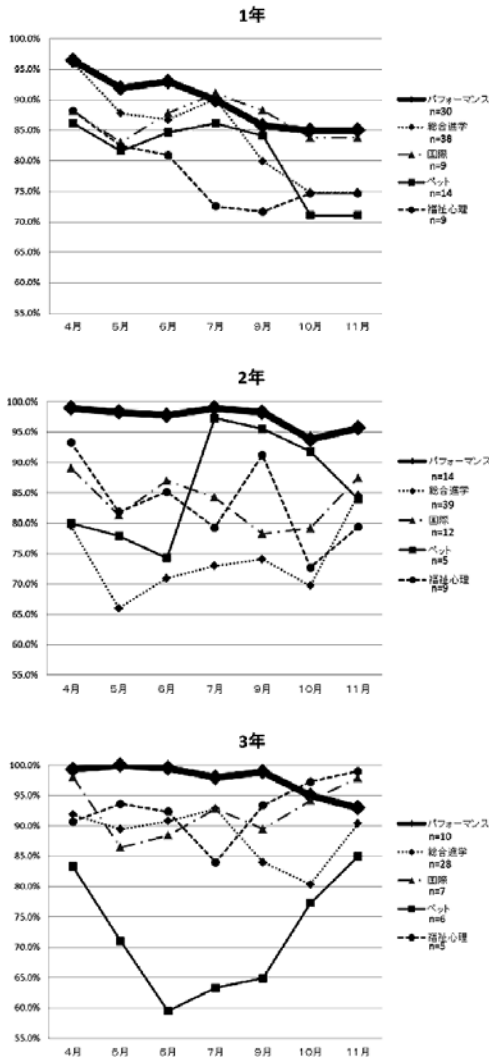


Figure 6 学年別・コース別・月別平均出席率（不登校経験あり）

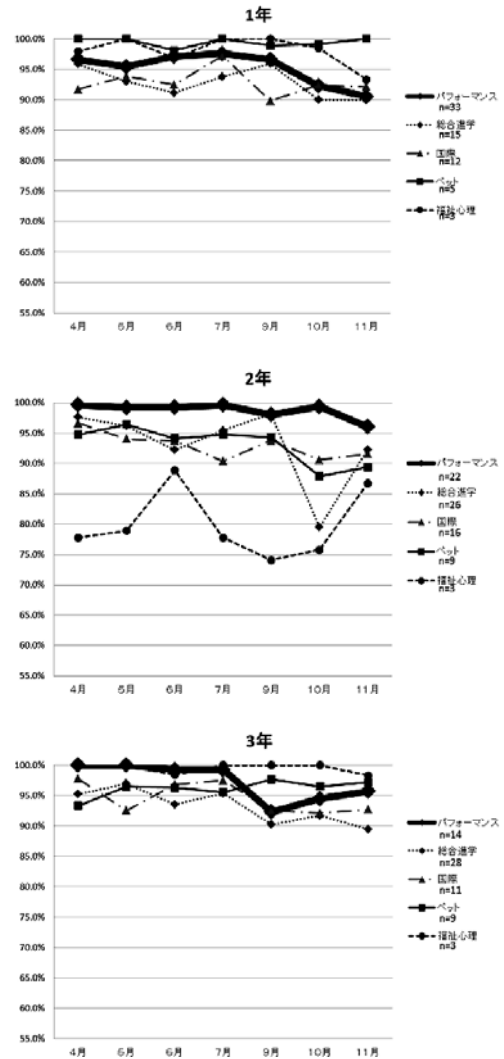


Figure 7 学年別・コース別・月別平均出席率（不登校経験なし）

出席率に大きな変動が認められた。しかし、パフォーマンスコースに限れば、1年生は、夏季長期休暇後に出席率の低下がみられたものの、その後はほぼ同じ出席率で推移していることが示されているが、他のコース（総合進学、国際、ペット、福祉心理）は夏季長期休暇後から下降している。さらに、パフォーマンスコースの不登校経験ありの2・3年生も、夏季長期休暇後の9月も出席率は高く、特に3年生になると、100%の出席率が示された。パフォーマンスコースの3年生に限れば、9月においては、不登校経験ありの生徒が不登校経験なしの生徒の出席率を上回る結果となった。他のコース（総合進学、国際、ペット、福祉心理）の不登校経験ありの生徒の9月以降の出席率はパフォーマンスコースの不登校経験ありの生徒より低く、月ごとに大きく出席率が変動する傾向がみられた。これらを検討してみると、不登校経験ありのパフォーマンスコースの生徒は、他のコース（総合進学、

国際、ペット、福祉心理）の不登校経験ありの生徒より、学校適応が進んでいるといえる。また、不登校経験なしの生徒（Figure 7）は、2年生の福祉心理コースを除いて、5月の連休明けや、夏季長期休暇後も平均出席率は90%以上で推移している。また、パフォーマンスコースの不登校経験ありの1年生の出席率が夏期長期休暇後に下がったが、2・3年生においては、高い出席率で推移していることが示された。不登校経験のありなしで比較すると、不登校経験ありの生徒に変動が大きい。このように、今回出席率を不登校回復や学校適応の指標にしたが、不登校経験のありなしによって、出席率に差が示されたことから、学校適応の指標として使用することは可能であると考えられる。

第5章 考察

5.1 精神的回復力尺度の下位因子とパフォーマンス活動との関連

5.1.1 「新奇性追求」とパフォーマンス活動の新たな取り組みとの関連

小塩（2011）は、「新奇性追求」とは興味・関心の多様性を意味し、多くの物事に興味を示すことは、それまでに経験していない新たな活動を生み出し、深刻な出来事から前へと進みだすための一歩へとつながると述べた（小塩，2011）。先述のとおり、不登校経験のありなしにかかわらず、パフォーマンスコースは他の4つのコースよりも新奇性追求得点が高いと示された。その理由のひとつが、パフォーマンスコースで取り入れられている、「殺陣」や、100名超が同時に舞台で行う「ダンス」「ラップ」など、今までに生徒が経験したことのないプログラムが継続的に取り入れられていることとの関連が考えられる。それは、パフォーマンス活動で、たとえ失敗しても、新たにやり直すことが可能であること、またそのなかから生徒の興味・関心の多様性が広がり、次への新たな一歩を踏み出すことができることが考えられ、新奇性追求に影響したことが示唆されたといえる。

5.1.2 「感情調整」について

小塩（2011）は、「感情調整」とは、内的な感情状態や感情に関連する心理的プロセスを、開始、維持、制御することができることだとし、深刻な出来事で感情が混乱しても感情をうまくコントロールし、混乱を収めることができれば回復への一歩が早まると述べた（小塩，2011）。本調査において、感情調整得点は、不登校経験ありの生徒の方が、不登校経験なしの生徒よりも低いことが示唆された。その結果、不登校経験ありの生徒は、深刻な出来事が起きると混乱し、感情をうまくコントロールすることが難しい可能性があると考えられる。本調査では、感情調整について、コース間の有意差が認められていないが、パフォーマンスコースの生徒には、インプロや芝居を通して、役を演じることで感情を伝える力が育まれ、演技を繰り返す結果として、感情調整に影響があるのか、今後の調査で検討する。

5.1.3 「肯定的な未来志向」と公演の関連

小塩（2011）は、「肯定的な未来志向」とは、将来の夢や目標をもち、その実現にむけ計画を立てることで、不安や脅威をもたらす状況下でも、前向きな展望

を持続けることができ、そのことが精神的回復への重要な要素であると述べた（小塩，2011）。本調査では、不登校経験ありの生徒は、不登校経験なしの生徒に比べ肯定的な未来志向得点が低いことが示唆されており、不登校の再発などの不安から、前向きな展望を持つことができないという状態が考えられる。しかし、パフォーマンスコースの生徒は不登校のありなしに関わらず、他の4つのコースの生徒と比較すると、肯定的な未来志向得点が高いことが示唆された。パフォーマンスコースの生徒たちは、ダンス、ラップ、殺陣、歌、芝居、インプロなどで、身につけたパフォーマンスを、公演で定期的に披露することができる。そして、次の公演に向けてのあらたな夢や目標ができ、それらの実現のため計画を立てる力がつくことが考えられる。それらが、結果として肯定的な未来志向の育成に繋がったと考えられる。

5.2 パフォーマンス活動で育成された「心・技・体」の調和

5.2.1 パフォーマンスコースと他コースの学校適応の比較

パフォーマンスコースで、不登校経験ありの生徒の平均出席率を学年別で比較すると、1年生よりも2年生、また2年生よりも3年生の出席率は高く推移しており、学年があがるごとに、学校適応が進んでいったと考えられる。また、パフォーマンスコースの不登校経験ありの生徒と、他のコース（総合進学、国際、ペット、福祉心理）の不登校経験なしの生徒を比較すると、パフォーマンスコースの生徒の出席率の変動が少ないことが示唆された。これは、パフォーマンスコースの不登校経験ありの生徒において学年進行とともに他のコースよりも、学校適応が進んだことが考えられる。このような結果から、本調査で出席率を学校適応の指標にしたことには、妥当性があると考えられる。次に、学校適応に寄与したと考えられるパフォーマンス活動について検討する。

5.2.2 パフォーマンス活動とコミュニケーション力

すずきこーた（2012）は、演劇の力とは、コミュニケーション能力の促進、表現力の向上だけでなく、自ら発見し学んでいくことだとした。また、渡部（2012）は、人間は動的、静的なジャンルの表現を芸術と呼び、表現への欲求は誰もが持ち、その源はコミュニケーションする喜びを指し、コミュニケーション力とは言語でなく、人に対する思いやりや慈しみの感情であると述べた（渡部，2012）。平田（2012）は、

日本社会全体に、コミュニケーション教育の必要性を強調し、そのためには、異文化、他者への接触をフィクションの力を借りてシュミレート(疑似体験)できる演劇や演劇的な授業の役割を体験教育に代わる重要なものと述べた。さらに、平田(2012)は、演劇を支える大きな要素は「対話」だとし「会話」との違いを述べ、現代の高校生の対話の能力育成がなされていないことを指摘した(平田, 2012)。パフォーマンス活動では、「自分」と「役」の対話、「相手役」と「自分」との対話等が重視されている。またパフォーマンスコースでは、対話やコミュニケーションの能力を育むために、生徒の交流企画などを充実させ、励ましあいやふれあいを通じた取り組みをおこなっている。

5.2.3 「役」を演じることと「自分」の成長

パフォーマンスコースには、大小合わせて発表の場が年間15回あり、生徒にとっては、毎回どの公演も新たな挑戦の場や、厳しい試練の場となる。また、パフォーマンスコースでは、日常の活動や公演を支える教員の指導は、生徒の不登校経験ありなしを考慮しないことを原則としている。あくまでも指導は、生徒個人の人格に向けるわけではなく、役柄や役割分担に関するパフォーマンスに対する指導や注意をおこなっている。このような役柄や役割に対する指導という形が、ある意味でクッションの役割を果たし、生徒への直接的ダメージをやわらげていると考えられる。つまり、不登校経験のある生徒たちは、先生からの指導を「役」に置き換えることで、直接的個人評価としてではなく、自分のパフォーマンスを磨くものとして受け止めることができていると考えられる。それらの公演では、自分自身の存在感や自分の持つ力など、自尊心を育成する機会であると考えられる。たとえメインの配役として選ばれなくても、アンサンブル(助演者)や、舞台・音響・衣装・プログラム・ポスターの作成等、様々な場面で自分が必要とされる場や力が発揮できる場がある。またこれらの公演は、誰一人欠けても成り立たない前提である。そのために生徒は責任を感じ、「休まない」「遅刻・早退しない」努力をし、そのためにも互いに助言やサポートをおこなう。公演は、自然と生徒同士を支えあう機会になると考えられる。伊藤(2012)がK高校を対象に行った、「不登校の過去・現在・未来」に関する調査(報告)からも、パフォーマンスコースの生徒は、将来に夢を持ち高校での勉強にやりがいを感じている者が多いと述べている。

5.3 総合考察

本研究では、身体活動を中心に据えた様々なパフォーマンス活動とレジリエンス(精神的回復力)の関連から、不登校回復過程への一つのアプローチを検討した。前述したパフォーマンスコースにおけるオーディションは、公演の度ごとに15回以上おこなわれており、体調、精神的な状態や学習状況によってもその可否は分かれる。パフォーマンス活動をとおして、厳しい試練や責任感への重圧など、生徒の負担は大きいと考えられるが、結果として、これらの活動から得られる自信や、さらなる新しい活動への欲求が自然と生まれると考えられる。そこから、深刻な出来事から前に一歩進む「新奇性追求」や、周辺への調和や支援から得られる「感情の調整」、また将来への希望を持ち、計画性をもって準備する「肯定的な未来志向」など、どんな困難な状況にあっても、折れない精神的回復力、つまりレジリエンスとの関連が示唆された。K高校のパフォーマンスコースでは、パフォーマンス活動が「喜びを実感できる学び」になったと考えられる。伊藤(2012)は、不登校という〈過去〉がそのまま〈現在〉に引きずられるのではなく、〈現在〉が輝けば〈過去〉の捉え方は変わるものであり、〈過去〉を肯定的に受容できれば、〈将来〉への展望も開けると述べた(伊藤, 2012)。

5.4 今後の課題

今後の課題は、パフォーマンスコースへの入学時点で、レジリエンスにおいて生徒の資質に差があるのか、資質に差があるのであれば、それは不登校のありなしによって違うのか。また、パフォーマンスコースの教員の指導のタイミングと質や活動の量がレジリエンスに影響を与えているのか。パフォーマンス活動を行っていくなかで人間関係がどのように変化していくのか。さらには、配役、役割分担、出演回数などによってレジリエンスに差が出るのか、など、被験者内の変化を縦断的調査で検討する必要がある。また、今後、生徒の変化をより詳細に把握するためにも、質的調査の必要があると考えられる。特に、不登校経験のある高校1年生は、不登校の再発や、中退などに関しても不安を抱えていると考えられる。そのためにも、不登校回復や学校適応にアプローチできるパフォーマンス活動を、早い段階で検討する必要があるといえよう。

注

- 1) 出典：文科省「学校基本調査」2013及び「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2013

2) 演劇活動の通称

3) インプロとは、インプロビゼーションの略称。俳優の演劇活動トレーニングのメソッドとして考案されたもの。役者に必要な演技力を高めるために開発され、様々なゲームやフォームがある。アイデアを生かしあい、台本などの決まりごとが何もないところから役や関係性を築き上げる即興劇。

4) 殺陣とは、演劇・映画などで行う、乱闘・捕り物・斬り合いなどの演技。パフォーマンスコースでは、木剣で稽古をし、剣の型を学び、複数名で剣（竹光）を使い斬り合う手付を学ぶ。

引用文献

深谷昌志（監） 2009 子どもの「こころの力」を育てる－レジリエンス－ 明治図書出版

Grotberg, E. H. 2003 What is resilience? How do you promote it? How do you use it? In Grotberg, E. H. (Ed.), *Resilience for today : gaining strength from adversity*, 2nd ed. Westport, CT : Praeger Publishers, pp.1-30

平田オリザ 2012 わかりあえないことから－コミュニケーション能力とは何か 講談社

石毛みどり・無藤隆 2005 中学生におけるレジリエンシー（精神的回復力）尺度の作成 カウンセリング研究, 38, (3) 53-64

稲村博 1994 不登校の研究 新曜社

伊藤美奈子 2004 不登校児童・生徒への支援－教育支援センター（適応指導教室）を中心に－ 下司昌一（編集代表）・井上孝代・田所撰寿（編） カウンセリングの展望－今、カウンセリングの専門性を問う－ ブレーン出版 pp.315-328

伊藤美奈子 2009 不登校 その心もようと支援の実際

金子書房

伊藤美奈子 2012 クラーク記念国際高等学校を対象とした「不登校の過去・現在・未来」に関する調査（報告） 子ども教育支援財団会報 特別号

三池輝久（編） 2009 不登校外来 診断と治療社

文科省 2003 不登校への対応について

文科省 2013 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

内閣府 2007 ユースアドバイザー養成プログラム（改訂版）

内閣府 2008 青少年育成施策大綱

内閣府 2011 若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）

小塩真司・中谷泰之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成－ カウンセリング研究, 35, 57-65

小塩真司 2011 レジリエンス研究からみる「折れない心」 深谷和子（編集代表）・新井邦二郎・沢崎達夫・諸富祥彦・大数見仁（編） 児童心理 金子書房 pp.62-68

Rutter, M. 1985 Resilience in the face of adversity : Protective factors and resilience to psychiatric disorder. *British Journal of Psychiatry*, 147, 598-611

齊藤万比古 2006 不登校の児童・思春期精神医学 金剛出版

すずきこーた 2012 演劇で授業をしてみよう！ 日本演劇教育連盟（編） 演劇と教育 晩成書房

田中英高 2009 起立性調節障害の子どもの正しい理解と対応 中央法規出版

渡部朱美 2012 社会自立と表現活動 日本演劇教育連盟（編） 演劇と教育 晩成書房

付表 1 精神的回復力尺度（小塩ら，2002）

新奇性追求

1. 色々なことにチャレンジするのが好きだ
2. 新しいことや珍しいことが好きだ
3. ものごとに対する興味や関心が強い方だ
4. 私は色々なことを知りたいと思う
5. 困難があっても、それは人生にとって価値のあるものだと思う
6. 慣れないことをするのは好きではない（*）
7. 新しいことをやり始めるのはめんどうだ（*）

感情調整

1. 自分の感情をコントロールできる方だ
2. 動揺しても、自分を落ち着かせることができる
3. いつも冷静でいられるようところがけている
4. ねばり強い人間だと思う
5. 気分転換がうまくできない方だ（*）
6. つらい出来事があると耐えられない（*）
7. その日の気分によって行動が左右されやすい（*）
8. あきっぽい方だと思う（*）
9. 怒りを感じるとおさえられなくなる（*）

肯定的な未来志向

1. 自分の未来にはきっといいことがあると思う
2. 将来の見通しは明るいと思う
3. 自分の将来に希望もっている
4. 自分には将来の目標がある
5. 自分の目標のために努力している

*は逆転項目